

三原市立第二中学校だより

校訓「響き合う二中っ子」

第20号

キャッチコピー「響き合っていますか、私たち」

平成23年3月9日

第64回卒業証書授与式を最高のものに

— 卒業生と在校生の感謝の心が響き合うとき —

3月10日に行われる第64回卒業証書授与式。3年生にとっては最後の授業です。3年生は最後の授業をどのように迎え、どのように締めくくるのでしょうか。見守ってみたいと思います。また、1・2年生は3年生の最後の授業をどのように見守める、どのように受け止めようとしているのでしょうか。巣立ちゆく卒業生の門出を心から祝福しつつ、先輩が築いてきたよき伝統を引き継いでくれることを願っています。

そのためにも、第64回卒業証書授与式を心に響く感動的なものにして欲しいと思っています。卒業生と在校生の心が一つになり、「誇り」と「絆」を共有する最高級の儀式となることを願っています。本校のキャッチコピー(合言葉)である「響き合っていますか、私たち」の確かな回答を期待しています。

厳粛な空気が漂う中、響き渡る国歌・校歌、卒業証書を受ける卒業生の立派な態度、現生徒会長の「先輩への敬愛の念を込めた送辞」、旧生徒会長の「後輩・仲間・先生・保護者への感謝の意を表した答辞」、感動的な式歌「仰げば尊し」・卒業生による別れの歌「旅立ちの日に」など、卒業生にとっても在校生にとっても感動を共有する最高の場になることと思います。

「先輩から後輩へ」「後輩から先輩へ」と無言のうちにも確かなメッセージが相互に作用し合う、清新な空気を感じさせるものとなるよう期待しています。そのためには、卒業生は言うまでもなく、在校生も立派な態度で儀式に臨むよう願っています。



抑制の美学

— 「大鵬に学ぶこと」「3年生に学ぶこと」 —

大相撲で「世紀の誤審」と騒がれた一番がある。判定にビデオが導入される前、1969年(昭和44年)大阪場所の大鵬—戸田戦である。物言いがつく際どい勝負は戸田の勝ちと決まり、横綱大鵬の連勝記録は45で途切れた。

テレビ中継のビデオでは大鵬の足が土俵に残っていた。報道陣が「横綱は勝っていた」と支度部屋に押しかけたとき、大鵬の語った言葉がいい。「横綱が物言いのつく相撲を取ってはいけない。自分が悪い。」と。

横綱といえども聖人君子ならぬ生身の人間で、心が乱れなかったはずがない。相撲の魅力を「抑制の美学」と述べたのは相撲ジャーナリストの杉山邦博さんだが、大鵬の言動がそれであったろう。(読賣新聞「編集手帳」2009.1.27より)

この出来事は、今から約40年前にあったことです。筆者(校長)はまだ少年でした。当時の流行語に「巨人・大鵬・卵焼き」というのがありました。日本の国民が最も好んだもののベスト3が「巨人・大鵬・卵焼き」だったのです。プロ野球の巨人と大相撲の大鵬はとにかく強かった。優勝するのが当たり前になっていたのです。また当時は、卵も貴重なもので、黄金の卵焼きはまさにご馳走そのものでした。

大鵬の礼儀正しさは、当時の大相撲を象徴するものでもありました。土俵上のマナーは言うまでもなく、土俵下でも横綱としての品格を感じさせました。横綱としての堂々とした四つ相撲は、安定感があり、大鵬の相撲道の型を形成するものでした。制限時間がいっぱいになると、必ずと言っていいほど二度咳払いをして仕切りに入るというのが大鵬の習慣(癖)でした。それが何とも大鵬らしい風格を醸し出していたように思います。相手にかっぷり四つに組ませようと、まともに突っ張らせようとも、全く慌てることもなく、難なく土俵際に追い込み、寄り切るという取り口は、圧倒的な強さを示すものでした。土俵を割った相手に手を差し伸べたり、両手で支えて相手のバランスを整え土俵下に転ばないように心を配る大鵬の姿は、王者の風格さえ感じさせました。

抑制の美学。勝っても喜びを抑え、相手に対して感謝の礼儀を尽くすという「相撲道の美学」と合格の喜びを、仲間の全員が合格を勝ち取るまで、据え置くという「仲間を思う美学」やわがままを押さえ、全体を意識して秩序を保とうとする「厳粛さを追求する美学」とは、重要な共通点があります。それは、相手を気遣う、周りの人々を気遣うという「思いやりの心」なのです。そのことが何にも代えがたい心地よさを感じさせてくれます。

3月後半の行事予定

日	曜	行事予定	日	曜	行事予定
10	木	第64回卒業証書授与式	23	水	公立高校選抜Ⅲ合格発表～3/24(木)
14	月	公立高校(選抜Ⅱ)合格発表～3/15(火)	25	金	修了式
17	木	公立高校選抜Ⅲ願書受付～3/18(金)正午	28	月	離・退任式
22	火	公立高校選抜Ⅲ入試			

